

葛西用水

～ 18世紀の100万人都市“江戸”の礎をつくった農業用水 ～

葛西用水は、日本三大農業用水の1つと称され、日本最大の流域面積を有する利根川の中流域から取水し、17世紀から現在まで日本の首都である江戸（東京）の北東部地域に広がる広大な農地に用水を供給しており、開削当時は幹線の有効延長だけでも約80kmに及ぶ長大水路である。

1590年、後に治世者となる徳川家康は伊奈忠次を総責任者に任命し、国家的プロジェクトとして利根川、荒川等の河川改修と農業用水路の整備を進めた。葛西用水は1592～1595年の間に江戸南部の葛西領の水源として亀有溜井を築造したことに始まり、最下流から用水需要の増加に対応すべく段階的に水源を上流に求め1660年に利根川に到達して水路体系が完成した。1719年には葛西領まで安定的に用水を送水する水利システムが確立され、この時から葛西用水と称するようになった。潤沢な用水により増産された食糧は、18世紀に人口が100万人を超えた巨大都市江戸を支え、19世紀にはかんがい面積14,000ha、収穫量は20,000tに達したといわれている。

プロジェクトは大河川の改修と新田開発が一体的に行われ、地形条件を活用しつつ旧河道に堰上高の高い堰枠で水位上昇と貯留を同時に行う「溜井」を設け、上流域からの排水を加えて下流の用水とする反復利用を特徴とした「関東流」の技術を駆使して進められた。また、歌川広重の「名所江戸百景」には、現在の東京スカイツリ一周辺が四ツ木通用水として描かれており、日本有数の大用水として食糧の安定供給を支えたとともに、舟運にも活用されていた。

亀有溜井の築造から約430年、水路体系が完成した1660年から366年経過した現在、かんがい面積は6,800haに減少したが、時代の要請に応じた整備が繰り返され、現在でも利根川の豊富な水源により埼玉県東部地域の水田農業を支えている。また、現存する3箇所「溜井」や用水路は、都市近郊の営農や水辺空間の提供に欠かすことのできない水利施設として存在し、住民による環境保全活動の場や学習教材にも活用されるなど、地域経済や生活環境に大きな役割を果たし続けており、2006年には農林水産省の「疎水百選」に登録されている。



まつぶしためい
松伏溜井図（1901年）



まつぶしためい
松伏溜井（現在）



めいしよえどひやつけい よつぎどおりようすいひき
名所江戸百景「四ツ木通用水引ふね」
うたがわひろしげ
歌川広重画（1857年）



日本国内位置図